統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

T 02
N 69
3

日本における統計学の発展

第 3 巻

話し手　宗藤圭三

聞き手　辻　博
　　八田英二

統計数理研究所図書室

1980年10月29日(水)

同志社大学光塩館にて

24952

24952

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ま　え　が　き

1）この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合（A）によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*（代表者）、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三潴信邦*、森博美*、山元周行（* 推進係）

2）インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。

3）この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。

4）この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。

5）速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以　上

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

辻　まず先生、統計学を専攻されました背景というか、理由みたいなものがありましたら。

宗藤　私が学校に残るときに、統計学を研究課題にするというのではなかったわけなんです。経済原論、金融論――別に私は経済哲学を希望していたが――を専攻することで大正9年9月に学校に残ることが正式に内定したのでした。前から残っておられた永田伸也氏が統計学を兼担する予定になっていたが、たまたま大正10年1月に死去されたので、大学の方から「君は数学に興味を持っておるようだから統計学をやれ」といわれ、そこで統計学専攻に決まっちゃったわけなんです。

私の学生生活最後の年、大正9年の夏休みに私が郷里の西条に帰っていたとき、同郷里の出身者の横山雅男さんが日本で初めて実施される国勢調査についての講演をするために西条に来られました。つまり、わが国で初めて大正9年の10月1日に国勢調査があるので、地方遊説に来られたのです。それで、私の父もその横山さんをよく知っていたもんだから、それではひとつ話を聞きに行けと――まだ統計を専攻するとは決まってないんだけど――そこへ行って国勢調査というものはこういうもんだというようなことを聞いた。それと、横山さんは陸軍大学の教授で、まあそういうことで……。

辻　統計の教授ですか。

宗藤　うん、陸軍大学の。後に私も学校に残ってから、横山さんに敬意を表しに陸軍大学の研究室を訪ねたことがありました。そこで直接に親しく雑談を交えながらいろんなことを聞きました。まあ、以前聞いた国勢調査の

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

話を思い合わせて、大したもんだなと思ったんです。

あの人――横山さんは立身出世の人ですが、後に杉博士の統計学校の後を引き受けて統計学社の副社長、後に社長となって「スタチスチクス誌」、後に改名した「統計学雑誌」を長年にわたって発行していたのです。大正14年、社長柳沢伯のとき統計学社創立50年記念の一事業として、明治10年までに出版された文献を集めて公刊したのです。私も昭和16年にはこの学社の評議委員に推薦されました。横山さんは杉博士の一の弟子というのですから、日本統計学の開祖杉博士の生前におけるヨーロッパの統計学説の翻訳その他によって、草創時代のなまの事情もよくわかるものと考えて、いろいろお尋ねしたのです。

ところが、直接にはあまり細かい話はできないんで、陸軍大学の研究室へ行ったところが、ここらの研究室と違ってたくさんの人がおる中で、暗いような部屋におられたんです。

でも、非常に親切に長時間にわたって会ってくださったので、まあ一層興味を深めたですが。

それで、話を変えますが、杉さん、横山さんの統計学社及びもとの統計学校の記録などによって、ある程度横山さんの古い文献を見ることができたんですが、まだその当時は直接には会っていなかったんですけれども、後に統計学をやるようになってからまた東京に行ったりしたときに、杉さんのお孫さんに当たるお嬢さんの嫁入りされたところが、ちょうど私の弟が東大生であって下宿しておる先だったんです。で、そこの家へ行った。そしたら、前々からわからないで困っておる文献が家に残っ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ている、それらの書類が相当たくさんあったんだけど、横山さんが大部分持っていっちゃったんだ、残っているのがあるがこれがわからぬ、これは何というのだろうかひとつ、というのが毛筆書きの日本の半紙に書いたものがだいぶあったんです。しまいには分けてもらいましたが。それが「毛」という字と羅紗の「羅」――「毛羅」、それに続いて杉さんの造語の「扨対欠」の文字が書いてあるんです。でも、だれもわからぬわけですな。「これは「モラルスタチスチック（道徳統計）」というのですよ」といった。「そんなもん、私の方にあってもしようがないから差し上げます」といわれたが、「いや、それはもらったんじゃいかぬ」というので、何がしかのお礼をして持って帰ってきた。ところが、これがいま手元にあればちょうど持ってくればいいんですが、郷里の方に送って土蔵に入れとったものだから、昔のものがわからぬようになったのと一緒にね、どうも紛失したらしいんですよ。杉さんのそれがあれば、ひとつ何とか書いてみたいと思ったんです。そのうちにもう書けぬようになったですがね。

大正10年3月に卒業して4月に学校に残ったわけですが、それから統計学をやるということになった。ちょうど私が学生時代から非常に好きであった左右田喜一郎博士は福田徳三博士の弟子ですが、後の一橋の教授でさきに西欧に10年間も留学して経済哲学の論文を発表し、それをまとめられた著書「経済哲学の諸問題」（大正8年3版）を耽読したことがあったんですが、その時代の風潮というもの、特に認識論に対して学生のときから、さらに残ってからも研究意欲を持ってそれを続けるだけの興

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

味があったが、経済哲学の講義はまだ開設されていないんです。ずっと後に恒藤恭先生がやられたのです。

だから私は非常にあこがれて、卒業論文として「経済価値論——経済哲学の立場より」というのを提出したわけです。そのときから興味を持ってたもので、恒藤先生が私が他で発表した論文などを見られて、私がそういう興味を持ってるのを気づかれて、学生のときに——これは前に1度いったことがあるんだが、法学会大会で研究報告を学生と先生とで発表するならわしになっていたんです。ちょうど私が大学の学部の2年のときに、夏前の法学会大会で研究報告を「限界効用学説の確立」という題目で行ったことがあるんです。その報告を聞いておられたものだから、後にちょっと御所へ散歩しようと、それでついていったんです。「どうだ、学校へ残る意思はないか、とにかく論文の原稿を見せないか」ということがありました。そんなとこを細かくいうと、全く個人的になりますから省きます。

なぜ、そういうことに興味を持ったかをまず申し上げますと、当時の風潮としての哲学——ことに認識論が重視されたときだけに、私もそれに興味を持ってましたんです。ことに新カント派の哲学、私どもが学生のときには新カント派というのが非常に流行した。H・Rickert、それからW・Windelband、こういう人たちの新カント派——西南ドイツ学派ともいってますが——それに私は非常に興味を持っていたんです。そのうちでリッケルトと一緒にヴィンデルバントのところで研究された左右田さんが新カント派の立場からいろいろお書きになって——

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

「貨幣と価値」「経済法則の論理的法則」などいろいろありますが――それに私は非常に興味を持って、文化科学と自然科学との問題を取り上げた新カント派のものに対して、一応左右田ばりにのばせちゃったんです。で、左右田哲学というものにこって、これは極端な表現をすれば論理主義ですね、すべて論理的にまとまらぬと意味がないと。この学派はいわゆる文化科学、Kulturwissenschaftを非常に強調したもんです。その系統にあこがれ、かつ左右田さんがリッケルトを相手にして、文化科学と自然科学の問題について論文など書かれたのを学生のときから興味を持ってのぞいていたもんですから、続けていろいろ読んだわけです。

そこで、その当時のことを考えれば、日本の思想界において自然科学と文化科学、ことに歴史科学ですね、それが非常に大切だということになって、何でも自然科学的に考えた17世紀からの一般の科学を基本的に突っ込んだ時代だったわけです。左右田さんにそういうようにあこがれていたんだけれども、どうも何か私も読んでるうちにひっかかりがあったんだが、ともかく左右田ばりにいろいろ書こうというので2、3書いたのですが、恒藤先生が――それは私が残ってた後に――よく私の下宿に来られて、先生が論文書かれるときには「自分で書く内容をここで発表するから、それに対して反駁せよ、ことに左右田ばりでひとつ反駁せい」と。恒藤先生は実在論的な方で、Simmelなどの問題に関して論文発表をしておられた先生ですが、私が学校に残ってからのことですが、先生の所見について左右田ばりでひとつ反駁せいといわれ、あるときにはもう長い時間をかけて話し合った

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ときもありました。そのときに禅問答みたいなことを恒藤先生はやられた。窓の外をフッと見て、「あすこの木の葉がどれも緑だが」――2階におったんですが――「どれも緑だが、なぜこちらの濶葉樹のあの葉はああいう緑とああいう形なんだ、あっちの緑のササの葉の細いのは、あれはどういうわけだ、これを左右田論理で証明せい」といわれて、しばらく考えたんですがね、答えられんかったのですよ。そのとき私を先生が戒めて「左右田論理に入ったら永久に抜けられぬよ、論理の帰着点を追求するというのは、ずっとどこまで行っても抜けられぬから、それを抜けるような研究をしろ」と、そういうようなことがありましてね。まあ、それ以後私は、どちらかといいますと実在論的なものが中心になってしまった。でも、やっぱり論理性というものはどうしても私は重要なものだと考えた。

その問題の論理と自然科学のような問題とに――論理学と数学、それから今度は自然科学と文化科学という問題に突っ込んでいくときに、私が自分なりで特に問題にしていきたいと思ったのが、左右田博士が「定命論的解釈」として片づけられた「大数の法則」に対する所見に疑義を持ち、その課題を究明したいと思い、後に統計学の重要課題に取り上げていこうと思い、単にこういう問題の科学的根拠というよりも、法則性というものの根拠を追求したいというのが私の念願でした。

そのときに特に私が――いまだに興味を持ったものは、さっきのいう左右田さんの哲学、いわゆるリッケルトの哲学、ことに「認識の対象」などであります。その問題の何か書かれたものがあるといいんですが……。そのた

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

めにリッケルトとヴィンデルバントの両者、リッケルトにとってはヴィンデルバントは、これは先生なんです。で、リッケルトと左右田さんはヴィンデルバントの弟子なんです。けれどもリッケルトに非常にお世話になって、左右田さんはリッケルトの理解者であったと。

だが、後に左右田さんがリッケルトに反対する。それで、その問題がヴィンデルバントが自然法則的なものというのを非常に重んじて、一般性を強調しながら文化科学、歴史科学のような個別性、そういうのをヴィンデルバントは同時に認めていくんですが、その個別的な場合の因果律というものを一般的なものと根拠づけなきゃいけないような立場をとっている。後に左右田さんは、ヴィンデルバントの方とリッケルトの両者にも反対した。リッケルトは個別性というのを非常に強調したんですが、それにも反対しながら個別的因果律というような問題を主張せられるようになられた。左右田さんの「文化価値と極限概念」という著書の中にいろんな論争が載っています。その中でも、左右田さんの理論に対して京都大学の哲学をやっておられた田辺元教授が、左右田哲学における個別因果律を問題にして反駁までしておられる。同時にまた左右田さんが反駁しておられるのが、経済哲学上の問題です。

私、そのときの影響を受けたのか、どうしてもそこらの問題に何かけじめをつけたいという気がした。そこで、私の統計学の講義にいつでも私は、昔からAd. Queteletを挙げるんですね、ケトレー。ケトレーで学生間に通っておるわけだが。そのケトレーの中に、どうしても私には重要視しなきゃならぬ問題がある。それを私はとらま

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

えて、いわゆる自然科学の法則と文化科学における法則性の問題の基本的違いの問題に立ち入ろうとしたわけです。私がケトレーに非常に興味を持ちましたというのは、もちろん私の恩師である財部静治先生が「ケトレーの研究」、明治44年に書かれた本があるんです。財部先生には著作はあまりなかったんですが――先生の本で、われわれが学生時代に、といっても私は統計をやるつもりではなかったから、初めから先生の本は求めてなかったんですが、卒業後に古本で買い求めました「社会統計論綱」（明治44年初版）があります。私が統計学の研究をしようと思うころには日本書としてはほとんどなく、理論的体系のものはこれだけですな。で、もう1つは高野岩三郎さんの、後に「統計学研究」（大正4年）と「社会統計学史研究」（大正14年）がまとめてこられたが、調査に関するいろんな論文があった。

辻　先生は、財部先生との関係ができ上がりましたきっかけみたいなものはどういう……。
宗藤　単に講義を。
辻　講義を聞かれたときからですか。
宗藤　それは、さっきいったように統計学を専攻する予定の人が死んだので、私に統計学を専攻せよといわれ、当時外来講師として同志社大学に永年来ておられた財部先生に意見を学校側からも尋ねられたようです。そしたら私にやらすべきだといわれたようです。
辻　財部先生の講義はどこで聞かれたんですか。
宗藤　同志社で。講義はノート式ですが、なかなかウィットに富んだものでした。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

辻　同志社で聞かれたんですか。
宗藤　あの当時は京大、同志社、立命館に講義に行っておられた。有名な先生の試験問題の例をいいますとね、「道行く若き男女の二人連れを見て恋愛統計がとれるや否や」という形でした。
辻　含蓄がある講義ですな。
宗藤　ああ、あるんですよ。おもしろいでしょう。
辻　おもしろいですね。
宗藤　ひと目、ふた目、み目こし、三目ごし、嫁御いい、と手まり唄などをノートさせ、ニコッとして教壇に立っておられることもあった。それから何かの句をボールドに書いて、知らぬ顔して黙っておられることしばし。学生がジーッとして何をいわれるか待っとんだが、ヒョコッと講義に入ったりね。まあ、当時有名な三大酒豪の1人でね、土佐の三大酒豪、経済原論の田島錦治、それから憲法の市村光恵の諸先生がそうだったんです。
辻　この時分に財部先生は幾つぐらいのときだったんですか。
宗藤　さあ、ええ年でしたよ。
辻　そんなに。だいぶん年だったんですか。
宗藤　でもね、いまから考えりゃそうでもない。酒飲みで、ちょっと早くふけておられたんですね。
　それで、文章が第一切れ目がないんです。「……なり」とその日の講義が終わったんですね。ところが、次の講義のときには「といえども」と講義がまた始まるんです。
辻　先生が学校に残ったらどうかといわれたときに、その「どうか」とおっしゃったのはどなたなんですか。
宗藤　恒藤教授。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

辻　その先生が学校に、まあ同志社に残ったらどうかといわれたと。それを先生が財部先生に相談されたと。
宗藤　いやいや、私が相談したんじゃない。全然財部先生とは行き来はないんです。学校がね……。
辻　ああ、学校が財部先生に。
宗藤　ええ、社会統計をやるという予定の人が死んだでしょう。それで私が残ったから、科目は勝手に経済、金融の方を認めてもらったんだか。ところが恒藤先生などの話もあったからでしょう。というのは、1つは研究報告にちょっと数字の入った形での研究報告をしとったんです、学生のときに。それで学校側があれに持たせたらどうだろう、という話を、まあ統計の専門で講義をしとられる人で、まだ続いて来とられたわけですからね、学校へは。だから、こういう者が残る、そりゃそれにやらしたろう、という意味だったんでしょうがね。
辻　財部先生が、それじゃ先生の統計学専攻にはオーケーというふうに学校に返事されたということなんですか。
宗藤　それ、公式にはね、財部先生に相談したら、非常にやるべきだといわれたと。私を説き伏せるためにいわれたんでしょう。財部先生はまだ講義しとられますから、私が研究するのは財部先生の承認を得なきゃならぬからな。こりゃ、当時京大からの講師ちゅうのは大したものだ。だから、そういう意味でしょう。今度は新たに残った者がおるかい、というようなことから始まったのかもしれない。
恒藤先生のは違うんですよ。先生が、学校に残って将来経済学やったらどうだといわれた。それからもう1人いわれたのは、田村徳治という行政法の先生なんです。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

それが法律をやらんかと、行政法をやらんかと。後に統計学を、経済の方面をやるということに決まったときも田村先生は、一遍南禅寺の湯豆腐屋のとこへ連れていかれて、そのときも「君、行政法をやってくれんか」――先生は行政法の講師ですからね――「わしの跡をつくるから行政法をやってくれんか」というようなこともあったんですよ。けど、もう決まってるからといって、私には。

辻　先生はずっと、学校の要請というか説得があって、それじゃ統計をやってもいいというふうに返事なさったんですか。

宗藤　いや、やってもええというより、やれ、という命令ですよ、あの時代はいやおうなしで。それが私、いやおうなしにやらされた科目ですよ。

いまの統計学でしょう、それから小島昌太郎先生の後にしばらく保険論の講義をしました。それからさらに農業経済の講義もやらされ、専門学校では論理学の講義を、それから哲学概論の講義もやらされました。それらも皆、ほとんど命令的ですよ。

辻　そうすると、どういうことになりますかね。先生が統計を専攻されるようになったという経緯はいまおっしゃったような形で「やれ」といわれたとすると、そのときには統計学のほかに……。

宗藤　経済原論や金融論、それから経済哲学がやりたかったものです。

辻　それで実際におやりになったのは。

宗藤　専攻は統計学。

辻　身を入れてというか、本気でやられたのは。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

宗藤　それは私の本来の研究には統計学。それから付属的に農業経済だとか、保険論とか、いろいろなもの。
辻　その方はやらされて。
宗藤　やらされてやったわけです。しかし、ためになった。
辻　そうですね、いろんなことをやられたおかげで……。
宗藤　それで学校側は――私の話はちょっともとへ返りまして、本当は大正9年の夏休み前に残れということはいわれたわけです、学生のときからね。それで、そのときに中島重先生――東大から来ておられて国家論の先生ですが、それがぜひ残れということを、まあその話し合いができとったらしいんですが。それで、私が就職は日銀に申し出てあったわけです。だから日銀と同志社と、てんびんにかかったわけです。そしたら、私がまごついていつまでたっても決めないから、親と相談した。親は日銀へ行けといったんです、同志社は卒業して。ところが私は耳を患っとるもんですからね、電話で困るだろうというんで私もちゅうちょしとったんですが、結局中島先生が――まだ統計の話も決まらぬときだが――毎日日銀か同志社か考えて、そのときどっちか思ったらすぐ統計をとってみよ、その数の多い方に決めたらどうだといわれた。まさかそんなこともできない、やっぱり個人だから両方を同時に一緒に考え、選別することになるからと、なかなかむずかしい。ワン・パーソン・ゲームだからなかなかむずかしいんですが、腹を決めなきゃならぬようになったのは夏休みになる前ですわ。それじゃ、よく相談して9月に帰ったらすぐ返事をくれと。それでも夏休み中説得されてた。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

辻　学校に残るように。
宗藤　ええ、決めたわけです。
辻　それが大正9年。
宗藤　9年の9月。いよいよ決まった以上、腹が決まったら願書を出せということ、助手に採用してもらいたいということで、それで9月に出した。そしたら即座に、即座といっても、まあ9月のうちに決定したんです。
辻　すると、その専攻が決まったのは大正9年の9月。
宗藤　いやいや、まだ決まってない。そのときは経済哲学、経済原論、金融方面でやりたかった。それで、さっきいったようにその翌年の、10年の1月に統計をやる者がおらぬからやれと。そのときの話です、学校が講義をしとられる財部先生の了解を得たら、それはこれにやらすべきだと。まあ、そのときに何かいわれたんでしょうよ。ぼくが学校の研究報告会で、ちょっと数理に関係を持たして話した。それは「飛躍の原理」にも関係があったときですけど。それで、そういうふうに決まったんです。それで私が財部先生に直接お会いしたのは、学校に残ってからあいさつに行ったときです。
辻　それから財部先生との個人的な接触が始まって、ということになるわけですね。
宗藤　ええ。しかし、これは学校の方からあいさつに行けよ、ということになって行った。ちょうどそのときに蜷川さんが先に行ってました。それで私が後から行ったんだが、先生に会ったら何やらの本を翻訳せんかい、というわけ、もう忘れたが。蜷川氏が「先生が翻訳せいといわれたろう」と。「実はいわれたよ」「あんなんほっときゃいいんだ、先生はあれが癖でね、私にもいわれたが、あ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

れもほってあるんだからほっとけ」といってね。私もほったんですがね。(笑)
辻　すると、先生が統計学を専攻されるようになった理由というのはそういうことで、まあ学校へ残れという話が大正9年にあって……。
宗藤　9月の教授会でもう決まったわけです。
辻　それで大正10年に入ってから……。
宗藤　1月にね。
辻　先任者が死亡されたので統計学へ専攻ということになったわけですね。それから財部先生との接触が個人的に、研究で始まったということなんですね。
宗藤　まあ学校の先生になってからですね、4月以降。専攻が決められたのは1月ですけど。
辻　1月ですね。

辻　そのころの統計学の水準といいますか、特徴といいますか、大体どういう傾向だったんでしょうかね。
宗藤　要するに日本書はほとんどないんです。
辻　翻訳紹介みたいな……。
宗藤　翻訳もほとんどなし、それから後でしたね。だから外国書で研究を始めたもんです。
　忘れたですけどね、1922年にはD. C. Jonesのものを読みました。財部先生がちょっとも学問的な指導をなさらぬ、酒の指導をされる。私は当時酒は飲まんかった。先生について回るのがかなわぬで、はしご酒でね。だから初めは長いこと会わなかったんです。ただ、決まったのであいさつに行けということがありまして、行って、それから、まあしっかりやれと。ところが、もう家内を

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

もらってからあいさつに行ったんでしたかな。変わった先生で初めどぎもを抜かれたんだが、入るなり、奥さんは元気かということをドイツ語でパッといわれた。そのときにそんなことを考えてなかったから、つい――それはまあわかる程度だったから――答えたんですがね。禅問答をするような人です。

それから今度はね、お手洗いに行かしてもらって戻ったら、「あれを見よ」というて、そこの手水鉢を指されるんですわ。あれ、何だろなと思ったんです。「わかるかい、学問をやる者はこれがわからぬじゃいかぬ」と。何だろな、と。しかし、りっぱな手水鉢にコケがはえてるでしょう。「なかなか古びたいいもんですな」と。「そこだよ、学問に古びた、コケのあるものを持ってなきゃいかぬ。若い者のやることだけでやるんなら、君、もうぼくの後をやる必要はない。ぼくはもう普通の、りっぱな講義をしてんだから、それ以上はやる必要はないだろう。さびが出なきゃいかぬ」と、さびを出せと。そのころ先生は本草学を非常に研究しとられた。で、そういうようなことがあるもんだから。それと同時に禅問答をやる人で、もうどぎもを抜かれることがある。何をいわれるかわからぬ。

それから指導をしてもらおうと思ったら、「君、あの本を読んだことがあるかい」「はあ、読んどります」と――幸いに読んどるとね――「そらいいだろう、しっかりあれ読め、あれはええ本だ」「先生、あすこにこういうことがあるんですが、どうですか」と質問したら、「わしも実は読んどらぬのじゃ」と。

実に変わった、おもしろい先生でね。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

辻　具体的な研究の内容になりますけども、先生が統計学を専攻されるようになってからご自分の研究課題といいますか、そういうものを見つけられていくようになるわけでしょうけども、それはたとえば学生時代のいろんな哲学関係の、そういった勉強とはやっぱり無関係ではなかったんではないでしょうかね。

たとえば「飛躍の原理」一つにしても、やっぱり私は何かそういうにおいというか、そういう気がしますけども。

宗藤　私は結局哲学に非常にのぼせてましたからね。だから、そういうような希望なり、根拠なりがありますよ。

それで私が本を出した最初のものは「統計学講義」というんですが、大正15年に京都の更生閣という出版社でありましてね。それがつぶれたもんですから、今度は平野書店というのに移したんです。そうこうしているうちに講義として何かまとめないかとのことで、「統計学原理」を京都の弘文堂から昭和5年に出版したのです。

統計学の私の立場というものは、やはり学生時代から非常に興味を持った認識論に根拠があるんです。さらに後に「現代統計学」(初版昭和34年、改訂再版昭和43年)を有斐閣で出しました。だから、あの当時学問に根拠を与えるということが学問の研究なんですね。だから、よりどころをはっきりしなきゃならない。そういう意味で私はそこを突っ込んでやった。そのときに法則性の問題を気にしないといけない。その法則性の問題を研究する、つまり統計学というものがまだ十分確立されていないような時代ですから、統計というものが科学的に、学問として本当に成り立つんだろうかどうかということが非常

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

に問題になるときで、私が前に申し上げたように左右田さん、リッケルトやヴィンデルバントという新カント派のもの、同時にカントにまた非常に興味を持っていたものですから、そのことなども実は後には――後といっても早くですが、西田幾多郎先生、あるいは田辺元教授などのような哲学の大家が京大におられた。それで、西田先生には恒藤先生のおかげでゼミに出ることにしたんです。あれはE．Husserlの〝Ideen〟についての演習に出ましてね、恒藤先生も出とられた。

辻　それは何年ごろになりますか。

宗藤　それは大正12年です。残って3年目ですね。

この演習はもう大評判でしてね、京大の本館の講堂の裏の教室で講義があったんです。私は直接了解を得てるから他大学であっても許されたんですが。なかなかわからぬ、むずかしい問題でしたんですけども、しかしおもしろいんですね。まあ、そんなことは個人的なんですが……。

学問としての基本的なもの、根拠を突っ込みたいというのが、やはり私が読んだリッケルト、それに左右田哲学から法則性の根本問題に入りたいと。というのは左右田さん、リッケルト、ヴィンデルバントの新カント派は、自然科学と文化・歴史科学というものを分けた系統ですね。同じ新カント派でもコーエン一派があるんです、これは数理一点張りです。

特にリッケルトの方は論理なんですね。私は論理が好きだったから、やっぱりそういう道に興味を持ったんですが、一番悩まされて大きな問題になっとったのがヴィンデルバント、先に申しかけたんですが、因果律の問題

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

を処理し、法則の問題を処理するときに、自然法則、あるいは自然科学の根底である自然因果律的な因果律そのものと、歴史科学としての場合の法則性というものとの間の根拠に、果たして自然科学の因果律と文化科学の因果律とが別個のものか、あるいは同時に自然科学の因果法則がこれを包摂してしまうんかという問題が、リッケルトを初めいろいろな論争になってたわけです。それを学生時代から読みかけておもしろかったもんだから、私ははっきり分けられるもんだというたてまえをとった。

当時、たとえば――ケトレーに帰らにゃなりませんが、ケトレーに強調されましたものの中に、彼の法則性が自然法則というものが根底になっているんですわ。したがって、たとえば「人口に関する法則」を「社会物理」に基づいて物理関係の法則と、その延長の法則と見たわけです。あるいはもっと極端にいえば、道徳統計として扱うものは社会現象的ですわね。それも自然的なものの社会物理における「延長の法則」と考えた。私はどうしても納得できない。歴史科学の個別性というものが新カント派で強調されたところが私の学生時代であったわけですから、そいつをどうしても生かさなきゃならぬ。それを生かすには純論理ではなしに、もっと違った、人間味のあるところのものに根拠を求めないと、文化科学にとってはいけないんじゃないか、というのでHegelの論理学、それからJ. S. Millの論理学、こういうようなものをあさってみたんですが、結局ヘーゲル風にいく弁証法的な――これはマルクスのものとは違いますわね。マルクスの場合、自然法則としての変革の弁証法としては外的な性格を持っております。ヘーゲルは市民的性格

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

を持ってます。

いわゆるマルクスが悪口をいった、ヘーゲルの弁証法は逆立ちしとる、とかいうようにいわれておるヘーゲルの論理学というものに非常に興味を持ったんです。

そういうことがあったのと、J．S．ミルの論理学――ミルは大きい論理学の本を書いてます――そのミルの論理学、その中に自然の斉一性という問題が全体をパッとまとめていく、基本的なものがそこにあるところをミルは非常にうまく表現してるわけです。だから、普通の自然科学の方は純粋の数理の方へいく傾向がある。けど、人間の場合には――当時そんなことをいっとったんじゃないが、いまいえば――人間が1＋1で2になるというようなのは、カント派の場合には"Idee"としてその前に持ってなきゃならぬですがね。そういうような数学的な、まあ万能で統一するというような中から、これはやっぱり自然科学の関係を――当時カントは自然科学、数学というものを最高の科学と考えていたんです。

だが、それ以外に歴史性を持たなければ、たとえばなぜ日本の国が日本といえておらねばならぬのか、日本の政治がなぜよそと違わなきゃならぬのかということを、自然科学じゃ証明つかぬのです。もし、つけるとすれば地域的な土壌そのものに、ここにおるから仕方なしに――つまり、いまでいえば島国だから日本はこうだということを、これは確かに条件としてはあるだろうけども、本質的なものは出てこないわけですね。だから、そういう意味で精神的な、質的な分野として論理性を強調せざるを得ない。そこで数理と論理を統一したい、そういう根拠を求めることがねらいであります。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ただ、その上に「飛躍の原理」というのが出てくるんで、それは同じような問題が左右田さんの中にももちろん出てきますが、田辺元先生と左右田さんの争いの中には——田辺先生はヴィンデルバントの方に似とるんです。左右田さんは両方とも非難していて、しかもリッケルトが結局においてはヴィンデルバントのものに含まれても仕方がない、ある特別の形で個別的な法則性の問題があるんだというようなことに入るのだが、これは左右田さんが完全に歴史性というものを強調したわけです。だからリッケルトなどで自然科学と社会科学というか、文化科学の違いを、これは後々科学問題によく出たことですが、自然法則の場合としての科学ですから、繰り返されるというやつですね。繰り返しが自然科学の特徴だと、ところが文化科学は1回きりのもんだと、その後再び出てくるものではない。つまり時間的な、歴史的な位置づけというものが入ってくるわけです。そこを、まあ左右田さんなどまた問題にするのはいわゆる現実性というか、歴史的事実そのものが法則なんじゃないということを問題にしなきゃならぬでしょうね。大変やっかいな問題ですが、歴史をいっとるとね。現実に、たとえば日本はいま、こうあるじゃないか、だからこう来なきゃいかぬというのは因果律をただ個別の現象形態にだけとどめていくわけでしょう、ここにこうあるから、こうなけりゃならぬという。実際はそういうことはありますよ。あるけど、それが絶対に根拠づけるものであるというわけにいかない。こういった問題を私は追求したい、というので考えたわけです。まとめるものがなきゃいかぬ。

ところが、これは当時の哲学では"sollen"と"sein"

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

というて、「当為」と「存在」というものをカント的には2つの原理で分けるから。それが新カントは1つにまとめる。そのまとめ方が「当為」なんですね、"sollen"とまとまるときと。ところが、その"sollen"というものにずっと入っていくと、ないようになっちゃうんですね。あらかじめちゃんとこういうものが――たとえばカント流にいってしまうと、カントは2つに分けますけども、5と7を一緒にしたら12になると、そのときに12というものは、この主観の中に、すでに持っていなきゃ12にならないと。

12というふうにいえる、ということでなければね。そういうことばっかりいっていた。

これはカント自体の問題。新カント派が変えていきますから、主観が主体になる。主観に走り過ぎたのが新カント派だと、ことに論理学にはね。

だから、それに反対するものとして興ったのが同じ新カント派の数理。これで統計に数理の、同じ関係でも数理的に関数という証明がつく問題と、心理的な根底になる部分との間は、これははっきり区別しなきゃならぬ。私は学生のときに新カント派でも特にリッケルト、左右田ばりに流れたものですから、論理主義を非常に重視したんです。と同時に、また私はミルの論理学を問題にして、それの「大数の法則」という問題に入ってきた。その根底に数学的なものと論理学的なものとの大数法則を考え、私は大数法則を2つに分けて主張した。「統計学講義」(1925年)と「統計学原理」(1930年)とにわたってである。後になって知ったことだが、Dr. Hans Peterの1930年と1935年の著作に、同じような問題が取り扱われ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ていることを知った。

そのこと自体が後の問題になってきましたのが、統計学の根拠づけの中で確率的な問題を取り上げた。いわゆるプロバビリティーの問題に突っ込んでいかなければならぬという問題に入ってきまして、私は早くからそういう立場を統一する形で歴史性と、それから自然性というものを基本的に含む、そういう根本的な、統計の科学的根拠を求めたいと。実は統計学は自然法則的に処理さえすればいいというのもずいぶんあるし、極端にいうと数学はそういう形の記号論理になるわけです。水谷一雄氏は論理主義を非常に強調した。それで統計というものが論理記号で処理する。

だから、あれはゴルトンだったかな、それから有名な――ちょっと名前を忘れたが、そういう面の論理性だけになると、私は後戻りになると思う。どうしても近代的な統計学に出てきておるのは――初めから私の立場だったんだから、まだそれを見ないときですが――やはりプロバビリティーの問題を根底に置きたい。そこへケインズが「A Treetise on Probability 確率論」(1921年)を書きました。これに私、非常に興味を持った。戦前、これについて書いたことがあるんですが、遅いか早いかの紹介の仕方も近代的な確率論に対応してくるようなこともありますが、ともかくも私の学生時代の研究が、実は私の統計学の基本構造を持っていたわけです。

辻　そうですね、そんなふうに伺うとそういう流れだろうと思うんですけども、現在の統計学の方向から見ますと、先生の統計学は――理解が間違っているかもしりませんけど――いわゆる実質的社会科学としての統計学を

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

主張しておられると思います。一方にはまた統計学は方法の科学だという考え方がありますね。先生のいままでのお話を承っていると、こうした先生の研究の方向を決定づけたのは、やはり先生の勉強の方向が哲学から入られた、そういうふうなものが非常に影響してると思いますけども、そのように理解していいわけでしょうか。

宗藤　ちょっと注釈を入れますと、「実在」は「実在」、"sollen、sein"というものが、2つに分けて考えるという考え方がフラスケンパーなどの、昔、本に出ていたわけで、私はそれはとらないわけですね。学問の基礎づけというものは1つにいかなきゃならぬ。それがどうしても解決できないから、「飛躍の原理」というものを主張してきたんです。

つまり、初めから統計学は集団的にしかつかめぬということを前提にしていっている。個別な、頭で考えるような"Idee"ではないという考え方。そうすると、集団というものはやっぱり実在しておらなきゃいけないんですね。だから、私はどっかに書いてますが、統計学というのは結局理解する学問なんだ、つくり上げていくんじゃなくて理解するんだ、あるべきものを理解して学問として取り上げるものだ、そういう考え方をとっておりまして、やはり、いまお話しのような問題の哲学の新カント派の影響でいきましたが、私が論理主義を非常に尊重したために、恒藤先生から実在論的な問題に問題を転換されて質問されてかぶとを脱いだんですが、それ以後「実在」というものを非常に尊重してきました、実在論の哲学というものを。

あれは何に載っていたか、得能さんの哲学概論などの

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

影響がありまして、何やらという――いま、ちょっとわかりませんが――後のそういう実在論的なものに一応まだ若いときに突っ込んだんです。そうして両者をまとめるんだが、科学というのは絶対性の問題では私はどうしても納得できない。科学を基礎づけるというときには実在であるものを説明づけなきゃいかない、というのが、やはり現実に力入れておるわけですから。そういう面で、カント哲学そのものにしたわけでもないんです。

ただ、これは拙書「統計的法則の根拠」(弘文堂　昭和10年　限定版)の中に扱った、かつて、これはあなたにも差し上げたはずですが、私が実はいろんな関係でこれをまとめたのは、ちょうど昭和10年の1月から3月末日までにまとめたんです。それで、そのときに私はこのしまいにつけておりまするが、まず、このものはケトレーの有名な"Sur l'homme"(1835)、実は私はドイツ訳"Soziale Physik"(1914)によったのでありまして、この「人間論」が出てから100年を迎えるに当たって、これを記念する意味で書くことにしました。それで、そのときに私、いままでとっていたものと関連を持たしてチュプロフとフォルヒャーの2人の学説、非常に両極端な学説、しかも統一される、その学説を私は展開して、両方の特徴及び細部の問題に携わった。そのことが、おのずと私の統計的な法則に対する基礎づけにもなるわけでして、そういう問題をこの中に、自分の立場というのか、わかるようになっておるんですが。

辻　いまの先生のお話伺っておりますと、結局法則性というのをいろいろ問題にしていかなきゃならない。ということになりますと、やっぱりそれは実質科学をとる立

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

場にいかなければなりません。科学論からいうと、そういう必然性を持って出てきますわね。

だから、そうなりますと、いろいろそこに論理の問題などが含まれていても、大きな流れとしてはやっぱり先生の研究の方向というのは、現在の統計学の立場から見ると方法の科学というよりも、むしろ実質科学という立場をとる。これは、そういう方向に必然的にいかざるを得なかっただろうな、というふうに私はいま伺っているんです。そこにいろんな細かい問題はありますけども、大ざっぱにいってそういうふうに理解しておりますけども、それは当時の学問的な水準といいますか、一般的な傾向からいいますと、先生がさっきおっしゃいましたように日本の統計学の創成期にあって、そうして翻訳紹介からいわば独自の統計学へ持っていくという傾向が先生の若いころにありました。

そういう歴史的な流れの中で、先生がそういう方向を打ち出されて独自の学問的な境地を開かれてくるという、そのいろんな背景を細かく伺ったわけですけども、細かいいろんな問題点はあるんじゃないかと思いますが、当時の統計学の水準、それから先生の研究の方向については、これで終わらせていただきたいと思います。

辻　時間がありませんので次の方向にいかしてもらいますと、統計学会の創設といいますか、そこのところの経緯はどんなふうなことだったんでしょうか。

宗藤　どういったらいいんでしょうね。それまでにいろいろの論文をお互いに発表し合ったり交換するようになりまして、おのずとお互いを知る面もできたわけです。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

辻　その当時の方々のメンバーはどんな方がいらっしゃいましたか、先生の交流の範囲では。思い浮かべられるようなお名前は。たとえば水谷先生もその1人ですね、それから蜷川先生、田村先生。
宗藤　それから中山伊知郎、森田優三の諸氏。
辻　伊大知先生は少し後になりますか。
宗藤　ああ、後ですね。
辻　大体先生がいま思い浮かべられるメンバーで、特に関西におられた方々は？
宗藤　関西では田村氏、それから蜷川氏はもちろんですが。なお、関西方面ではさらに猪間驥一氏、森田優三氏。
辻　水谷先生は？
宗藤　水谷氏もいたでしょうね。
辻　それから中川先生は？
宗藤　中川友長氏も出てきたと思いますがね、あれは東京ですね。それから……、名前をど忘れしまして。
辻　財部先生は学会創設に何か力をおかしになったんですか。
宗藤　財部先生初め神戸正雄、藤本幸太郎、汐見三郎というように京大、一橋のご年配の先生方が主でしたよ。
　参考までに、日本統計学会創立その他については、森田優三著「統計遍歴私記」(昭和55年　日本評論社）に詳細、正確な記述があることを挙げておきます。
辻　初めはどういう方々から、どんなふうに声がかけられたんですか。
宗藤　これの興る理由は、国際統計会議が日本、東京で開かれたことが前にあるんですが、何回目かのときに。そのときに、各国では国際経計会議の出席者というのは

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

学者なんですよ。ところが、日本は官庁の者が皆行ったんです。それを東京の森田氏を初め、東京の大学の先生たちが問題にしました。集まってくる者は何こうは学者なのに、なぜ日本では政府代表が出ていくか、学会に知らせもせぬじゃないかというようなことが問題になりましてね。これは国際統計会議といっても各国の事務官の会合と違うんだから、研究をするところなんだから、学者を出してくれということを強調しようと。

ところが、各国には学会があるんです、国でただ1つの学会が。それなしにばらばらの個人では、自分はそういうところに出たいんだというわけにはいかぬでしょう、権威がないですわね。だから学会で推薦し得るような、そういう権威を学会として持つことが学者としては必要であろう。そのために、ぜひ日本統計学会というものをこしらえようというので、13人の者、すなわち東大の有沢氏、中川氏、一橋の藤本、中山、森田の諸氏、早稲田の小林氏、名古屋の郡氏、同志社の私と神戸大学の水谷氏と、それから同じく柴田銀次郎氏などが発起人になって、学会提唱しようと、創立の世話人になったわけです。これらのいきさつは森田氏が「私記」に述べておられる。

そうして昭和6年でしたか、いよいよ熟しまして、京大の老先生方を顧問格にして、京大の南の方の吉田に京大の楽友会館というのがありますね、あそこで発会式を行ったんです。そのときに一般の人を募ったらずいぶんたくさん出席されまして、非常に盛大な会になった。

それで、最初は財部先生なども発会の辞を講演されておられます。有名な句まで挙げておられますが、その発会の辞だけはほかのことより、ああ、これが端緒だな、

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

と感じました。つまり、総会、打ち合わせ、講演とで2日間にわたりましてね、まことに意義深い本学会創成となったわけですね。そうして、講演としてはその日の晩に京大の主な先生が2人ばかり、発会の辞は財部先生が講演されて、その年――昭和6年――はそれで一応打ち切る。それじゃ、その次の第2回は東京帝大で学術研究発表会をしようと……。

辻　第1回に京都で開かれたというのは、特に意味がありましたんですか。

宗藤　やっぱり京都が重きをなしていた。京都、神戸、こっちの方に統計に関する先生が相当おられたんです。財部先生が外遊しておられるときに高田、あるいは汐見の両教授がかわって統計学の講義をされたようです。だから、これは皆、統計学専攻者のような――本来は違うんですがね――それで、東京は京都を中心にしなきゃ動きがつかぬ面があったんですね。

それは、ずっと後にこういう事情があります。たとえば経済学用語制定の専門委員会の実際の活動を、文部省では関西の委員でやらせたんです。あとのものは東京で全部やりましたよ。だから、何となく統計が関西に魅力的なものが、文部省でもそういうふうになったんですが。

最初はとにかくここで発会式をやるのが一番――というのは東大の方で、だれを中心にやっていくかわからなかったんでしょうね。だから、統計に力入れるのは関西に多かったんでしょうね。蜷川氏もおるし――まだ、あのときはもちろん知事じゃないですけども。それで、森田氏が関西によく行き来しましたからね。蜷川氏の関係では森田氏がよく出入りもしておられましたしね。たと

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

えば蜷川氏の外遊したときの留守宅が下鴨にあった、そのときの――前の奥さんですけども――そういう留守宅の世話などわりあいに森田氏がやっていた。私も近かったから、よく行ったものです。まあ、それは後の関係ですが。

何となく一橋の連中に親しみを持ってました。神戸にも持ってました。東大でも有沢氏などは、私も親しんでいました。それで、いろんな論文やなんかのことで、たとえば有沢氏が私の書いた本を批判したところがありましたね。そういうこともあったんでしょう。

とにかく日本統計学会は関西で旗上げしたんです。その次の会からは研究発表の大会である意味で、真の研究報告会を持ったんです、東京帝大で。

辻　第1回の総会ですが、そのときの特徴を一言でいうとどういうことでしょうか。要するに一堂に会してということ……。

宗藤　総会をやって、学会をこしらえ上げて、もっと後にどんどん入ってくるのがねらい。

辻　そうすると、主だったメンバーが一堂に会して学会をつくるということが主であって、研究報告は第2回目からということなんですね、実際的な活動といいますか。

宗藤　そうです。そのときに総会をして、いろいろの組織をこさえるのに発起人を、とにかく申し込みを受けて総会をしようという形でしょう。それで、こういう学会をこしらえました、よろしく、というのが講演会でしょう。だけど、学会の報告と同じような意味合いで発会の辞や、いろんなものがあったわけです。

それは、1つは東京に官庁があったから、東京のひざ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

元でやっとるのはおかしいですわな、事の起こりが……。
辻　そういう配慮もあったわけですか。
宗藤　そのことは私も責任持っちゃいえないがね。発起人に入ってくれぬかというので、私は入っただけでやったんですがね。13人の発起人は学校におるんですから、神戸も、東京も、皆入ってます。
　それで、最初は学会報告をするというたって、学会があれば研究報告の準備もするでしょう。総会をして、会をこしらえるんだから、それだけで非常に意義を持ったわけですね。そのかわり、第2回は研究報告会と。で、第2回に東京大学でやりました。そのときは私も報告しました。蜷川さんもしたですね。
辻　第1回の旗上げが、そういう形で関西で行われたということになるわけですね。

辻　それでは話に入りますけども、第2回の東京で行われた統計学会大会は東京大学ですね。そのころの研究、いま先生のご記憶に残ってるのはどんなものがあったんでしょうか。研究の傾向といいますか……。
宗藤　まだ学会としても第1回目の報告会ですからね、めいめい自分の研究をまとめて発表するということで、どういう傾向というような……。共通テーマはもちろんなかったわけですね、初めての試みですから。
辻　先生は何をなさいました。
宗藤　私は物価指数の問題で、後に同志社論叢の昭和7年の4月、9月号に載せたわけですが、「物価指数における構成的抽象性の検討 ── 相対的歴史性との関連において」という題をつけて、物価指数における構成、構造で

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

すね、「構成的抽象性」。これは当時日銀の物価指数、地方の指数をあわせて材料を集めていたんですね。そういうときの物価指数について、1つは疑問を持ったんです。

某商工会議所が指数をつくってますのでね、商工会議所の倉庫に一夏、何日間か入らしてもらって、古い資料を引っ張り出して、その資料で、果たしてどういう物価指数作成の手段をとってたんだろうかを調べたんです。ただしその当時は、そういうことを調べたんでは見せてくれないから、ほかのことで調べたいので、ということで調べたら、私の見当つけておったとおりの処理が出てくるんですね。それで、それを直さねばならぬという形のものを学会に訴えたいというので、そういうややっこしいものですが、報告をしたわけです。

ただし、これはちょっと困った問題なので、名前はいまでもぐあいが悪いかもしれません。学会のときは名前を伏せておったんです。

辻　もう時効になっとるでしょう。(笑)

名古屋なんかの商工会議所の生計費指数なんかも、このころじゃなかったでしょうか。

宗藤　あれは郡菊之助氏がやっておられたんですが。

辻　朝日新聞がやったのは、昭和6年から発表されているというふうに記憶ありますがね。

宗藤　朝日新聞の生計費指数については、昭和11年に私もその問題を書いた。

辻　昭和6年から発表されているのは？

宗藤　昭和6年のはあっても科学性が非常に低いんですね。なぜかというと、日本の家計調査というのが大正15年から指数の評量値が考えられることになってきたんで

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

すけれども、内容が十分整ってなかったわけです。

だから、私はそれに関して書いたことがあるんですけど、どこに欠点があるかということを書いたことがあるんですが。とにかく珍しいものです。

辻　その問題のポイントというのは、ご記憶ないですか。

宗藤　つまり、標本選定が生計費を本当にはかる標本であるかどうかということが、1つの問題です。次いで処理の仕方とにある。ちょっと、いまはっきり覚えていませんけども、いろいろそういう点で問題点があるということを書いたわけです。

辻　大正15年に内閣の統計局で第1次の家計調査が行われたというふうにいわれてますね。そういうものを踏まえて、大正の末から昭和の初期にかけて生計費の調査のようなものが盛んに行われていったと。そういう時期といいますか、その時期に合わして先生の研究がそういう方向に行ったということなんですか。

宗藤　それはありましたね。家計調査は、後に昭和6年から統計局の家計調査報告を毎月出すということで、やることになったんですわ。大正15年9月ないし昭和2年8月の1年間にわたりますけども、非常に貴重なデータを提供したのが、この第1回の全国家計調査です。

ただ、それは家計調査の基本的な計数、つまり比率、ウエートを、重さをつけるウエートをねらうというやつなんだから、そういうのが出てから、だんだんいろいろ調査がやれるようになったんですが、あと、これが続かないんです。なぜかといえば、全国的にやったんですわ、第1回の家計調査。これは外国の要望でやらざるを得なかった。国際会議に出たら、おまえとこの生計状態はど

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM
24952

うなんだと聞かれたら回答できなかった。それから統計局がそれをやらされたわけですね。国勢調査も同じく大正9年からね、国際会議のときの要望でやらざるを得なかった。それで、国際会議場に出ていく限りは労働者の問題が必ず出てくるわけでしょう、生計費の問題がね。それで、理論生計費を使うかなど、いろんな問題があったときですから、こういうものがあちこちでやられる。大阪市もやってましたよ。

それから、こういう生計に関係持って大きな役割りをしたのは、高野岩三郎さんでした。

ところが、ここにどこにも書かれていないが、ちょっとおもしろい問題が、私にしたら歴史的な意味があるもの……。それは、昭和6年9月からいよいよ家計調査を本格的に毎年9月から翌年8月までの調査して、発表するということを決めたので、それに先立って――関東側ではある程度やったんでしょうが――関西の学究者に諮問されたんです、どういうふうにやったらいいか、意見を徴したい。

その当時汐見教授が中心になっておりましたが、関西では田村氏、それから水谷氏、それから私、そのほかもあったかもしれませんが、東京から来た委員が1人、はっきりわからないが伊大知氏か、あるいは杉本栄一氏だったかと思うんですがね。しかし、あんまりとっぴなんでね。その当時の何かに、調べれば出てくるかもしれません。

もう1つ、そのときに都留重人氏がアメリカからちょうど帰ってきて、これが向こうの事情をいろいろよく知っているので、ちょうど京大の百万遍の角のところに菓

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

子屋がありますわね。その菓子屋の2階で集まって相談、討論会をやったんですよ、都留重人氏も来て。それで、いままでどういう欠点があるか、どういう点を直したらよいかを、いろんな点を考えてみて、いよいよ本格的に昭和6年から家計調査をやるんですな。これは10都市ぐらいでしたわね。それをやるならどういう点に気をつけるかというのを、ずいぶん議論したんです。それから、戦争事情の悪化とともに昭和16年以降統計が出ぬようになった、あそこまで家計調査を続けたんです。非常に重要性を持っている、その最も妥当であるような調査をやる予備的な交渉がそういうときにあったということが、私は非常に意味があると思っておるんですよ。都留重人氏、外国のことを知ってますからね。それは一般には発表しない。(笑)

辻　そうすると、当時の第2回の統計学会の傾向も、そのような傾向というふうに考えてもいいわけですか。

宗藤　いやいや、むしろ調査に対して批判的になったのは戦後デミング氏が来てからです、戦争に負けてから。それまでは官庁統計というのは権威を持っていろいろやってるから、いまのように正直に相談をして、本当に役に立つのにはいままで家計調査、いろんなことに触れた人などが寄って意見を出そうと。私も統計学会の3回目か4回目か、統計局で発表するときに家計調査の問題も発表しとるから。そういうようないろんな点で向上する時期がありまして――それはめんどうになりますけど、一応は権威を持つものとして研究されたわけです。

辻　いまのお話はもっと後の？

宗藤　後の方ですね。むしろ家計調査がだんだん発表さ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

れるに従って、調査の重要性というものが他の方で出てきたわけですね。

家計調査は同時に物価指数の問題に関係がある。

だから戦争に負けてから、昭和21年からまた家計調査をやるというので、進駐軍が東京や京都などについてきて――ついてというよりも主体になって来て――京都における統計学者というのを集めて意見を具申させられたんです。今般いよいよ戦後の昭和21年7月から消費者価格調査を実施して、そこへ物価指数問題を持ち込み、物価指数はフィッシャー算式を使うことに予定しているから、これに対して意見があればいえ、ということで呼び出しを受けてた。

辻　それは戦後の話ですね。その当時はどんなぐあいだったんですか、昭和6年の、われわれの知らぬころの。

宗藤　それは、いまいいましたように大体統計局が主体になってやってますからね、東京の方でいろいろしたかもしれませんが。

いずれにしても、前のは生計費指数を中心とした、物価の消費生活に対するウエートをつくることと、商品を決定することなどに重点があったのが大正15年9月ないし昭和2年8月ですが、本当の生計費、つまり家計としての調査というのが十分にできてないというので、昭和6年から、それをやったわけですね。

辻　つまり家計調査を。

宗藤　家計調査に使えるものです。それは同時に世界的な情勢でもあったわけです。国際舞台に立つには家計調査がないと、国民の生活状況が統計資料として出てこないわけです。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

どうしてもやらざるを得ない。それが後には戦争に関係がありますね。家計調査をやっておけば、どこの地方でどういうような物資が調達できるか、あるいはいろんな人達の生活をどこまで切り下げることができるか、という問題になってくるわけです。

それからもう1つ、昭和19年のときの研究会があった。あのときに生計費の問題で、私は、文部省の研究課題が動員本部の関係で「生計費の水準」を決定するということを、東京の学者たちと一緒にやったことがあります。

あのころには、もうカロリーが国民に十分に与えられなくなったんです。だから、それをもっと基本的に調べればいいんだが、もう公にはできなくなった。それが昭和16年に発表できなくなったんです。負けるとひしひしと――そこまでいっていいかどうか知らないが、16年に出せなくなった。

これは、人口構成がすでにわからなくなった。何歳の者がどれだけおるかわかりもしないし――家族がわからないんだから。もう、ほとんど家族の主なる者は戦地に出てましたからね。それでも家計か、という。東京なんかでも、焼けたときに家なんかありゃしない。

それに家計費には家の費用、家賃とか何とか問題になるでしょう。だから、そういう点を考えると、もはや根本的に改革しなきゃならぬ。トタン張りのつくろったところに入っとって、家賃払って、ちょっと考えられぬですわね。だから根本的に、東京並びに大都市の生計というのはなくなったんです。だから、あの辺で行き詰まっとったんですね。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

辻　少し話が変わるかもわかりませんが、当時――いわゆる学会の創成期に、水谷先生なんかの研究が非常に特異な統計学だったという話、前に先生から伺ったことがありますが、いわば、いまの言葉でいえば「数理統計学」といってもいいんでしょうか。

宗藤　あの人のは全然違う。記号論理です。統計というのは記号の論理学、「統計学は論理学である」ということです。初めはそうじゃなかったんですがね。だから、ぼくなんかとよく議論して――ぼくもBooleやなんか、いろんな、あなたもよくやっていらっしゃるでしょうが。だから、論理学というのはぼくの主張したい一面ではある。でも、わかっていったんですが、物価指数などについて、そういう問題が起きるはしりになると。

大体水谷君が一橋を出て、京大の理学部の園正造教授のもとで数学を研究されたんです。

だから、数学をここに応用してやるということでした。

辻　その当時はいわゆる「推計学」という、現在いわれてるようなものは、まだあんまり芽ばえていなかったわけですか、日本の統計学会に。

宗藤　戦争のときに数理統計関係の人が、海軍の軍需品についての研究をさされたんです。

軍事というたら言い方が悪いけど、戦争に関係のあるいろんなものについて。それは潜水艦を基本として研究が始まった、それを強制的にやらされた。

それはどういうのかというと、潜水艦は電池を持って行動しなきゃならぬですね。それで電球が要るわけです。電池、電球の持続性を研究する。何カ月も海の底にひそんでおって、明かりをつける電球もダメになったら大変

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

です。それらの事故が起こったことがあると聞いてます。電池にしても同じことですが、戦争のために資源がほとんど枯渇したでしょう。何百個の電球が要るので持っていこうとしても、工場でつくらせれば非常に不完全な材料を使わなきゃならぬ。だから、数理的にどっかの標本を抜き取り検査し、前提として電球の寿命の確率を計算して、何個持っていって大丈夫です、といったのが失敗したと。

原材料、ここが統計としてはやっぱり現実のデータの問題にもかかるんですが、プロバビリティーだけで安全だというのが、プロセスが全然知らされない。つまり、データそのものが非常にまちまちのものを合わさねばならぬ。寿命が短いんですね。それをうかつだったという問題から、非常に海軍から怒られた。一時そういう研究者にとって厳しいことがありましたよ。

それで、戦後からそういうものを、やっぱり標本調査をやるにはもっともっと基本的な調査をしなきゃならぬというときに、イギリスのR．A．Fisherが、日本でいえば増山さんなどが推測統計としてオリエンテーションをしましたが、標本における確実性の問題を研究することを主張した。R．A．フィッシャーは農業に関してやりましたわね。それが非常に重要な標本調査、しかも確率論的な問題として考えられるものであって、ああいうものが非常に強く研究されるようになったのは戦後ですが、戦前から、もう、そういう確率を問題にしていかなきゃならぬ研究というのはあったようです。

ただ標本調査、生物学のお医者さんなんかは、その点非常に強調してますよ。少数の患者の上にやるんであっ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

て、いつでも少数でやると、みんなまちまちになっちゃう。だから標本の選定というのは十分気をつけてやらなならぬし、その標本から出た確率は、どこまでそれが妥当性があるかということを、よほど吟味しなきゃならぬと。よくいうけども、数値計算をして、どの範囲に入ればいいなんていうことは切り捨てが出てくるわけでしょう。ここからここまでがカット、その切り捨て部分というのはどういうところで切り捨てるんか。これは数学の確率からいって、めったに起こってこぬところだからというて……。

小・中学校でも応用しましたわね、真ん中の方だけやるという。ところが、それは完全な標本がそろうときならそういうふうにいえるんだろうけれども、病院やなんかで、あっちこっちで患者が入るときの初期条件の性格が著しく違ったものを調査したって、ここから切り捨てていいということがいえるかどうかというので、ずいぶん問題になりました。

そういう点も、もっと標本的に確固たるものにしたいというのが、推測統計の増山さんを初めとしてやったということです。

辻　いま伺っているのは戦前のころの、統計学会創成期のころの、先生おっしゃった海軍の潜水艦のお話ありましたが、そのころは海軍の、そういうところで、いわゆる品質管理といっていいようなところなんですかね。

宗藤　品質管理ではないんです、工場でしたわけじゃない。生産工程じゃない、資料の方なんです。つまり、何十時間もぐって、今度は敵の軍艦がヒョッと上におったら出らりゃせぬでしょう。動いたら、すぐやられちゃう。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

そうすると、何日でも中におらないかぬ。そうすると電池がないと明かりもとれぬ、のみならず……。
辻　電池の寿命の問題になってくるわけですね。
宗藤　だから人間の寿命というよりも、そういう電球、電池の寿命が最も重要な問題になったわけです。それをちゃんと計算して出したのが、妥当性の高いものをやったんでしょうね。一遍、とにかく問題が起こった。浮かばれなくなったときがあるらしいんです。
辻　発表した平均寿命のとおりじゃなかったわけですか。
宗藤　検査したのからは、そういう例が出たんでしょう。ところが、今度は個数を多く持っていくとしよう。そうするとつくった工場が違いますから、かりにU工場、T工場とか、その他のものの製品がまじってくるでしょう。
　材料がいいところはいいんです。材料の悪いところは――飛行機がダメになったのも同じですわ。アルミは純度が違うんです。これは私が戦もとの朝鮮に行ったときに、見聞したことがあるんです、戦時下に。ほんとに問題にならない。飛行機は1回しか飛べませんよ、というんです。それでも仕方がなかった、まぜものが多い。そうすると、急降下すると折れちまうんですね。もう、はっきりしているんです。
　それで、純度の高いものをつくっているという、あの大きな工場に私、見に行って回ったときに、ほんとに純度の高いのはほんの少ししかないんです。それと同じことが電球や電池にも起こったんでしょうね、材料が材料でしょう。
　だから、人間でもいまごろ非常に寿命がようなったというのは、昔は――これはつけ足しになるけども――人

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

間の生活の地盤というのが非常にジグザグなんですね。いまは大体同じようになったでしょう。だから寿命延びるはずですわ。

辻　要するに、潜水艦に持ち込む備品に問題があったにしても、統計学の1つの問題といっていいかどうか、その辺は問題でしょうけれども、要するに現在いわれているような「数理統計学」というのは、いまの先生方の始められた統計学会の中でどうだったのでしょうか。

宗藤　あれは、まだそれまでなかった。

辻　つまり、第何回目だったかよくわかりませんが、そのころの統計学会の方向というのは数理関係といいますか、いまのような、そういう研究と全く違った方向で学会がされていたんですか。

宗藤　日本統計学会に会員として大ぜい入ってきたのは、ずっと後です。数理研究所などができてから。

辻　いつごろになりますか。

宗藤　戦後でしょうね。あるいは戦前にしても情勢が悪くなってからかもしれません。私なども広島で推計学の発起人の、総会があるから加入してくれということでしたが、日本統計学会の評議員をしてましたからね、失礼しました。

辻　それは、そういう方々の間から上がった声なんですか。

宗藤　上がったんでしょうね。

辻　あまり時間がなくなってきましたけども、いままでずっとお話伺って、先生方が学会を始められたころ、それから同時に、日本のいまのような生計費、あるいは家

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

計調査の始められた最初のころですね。そのころのことを思い浮かべられて、特にこういう点は強調しておきたいということがおありでしょうか。大正の末から昭和の初めのころにかけての学会の、あるいは研究の話でもいいし、また調査の内容に触れるものでもいいんですけども。

宗藤　ぼくももうちょっと、そういう材料でも出しとけばよかったんだけど。

辻　先生が統計学を専攻されるようになったあのころは、歴史的に見ると、いわばそういう意味での調査論からの1つの区切りといいますか、そんなふうにもなるんじゃないかと思わぬでもないんですがね。戦前の調査の生計費、家計費に関しては一応の完成期であると同時に、また新たな方向づけの時期でもあったというふうに考えてもいいかもしれませんね。

宗藤　そうですね。私は何かに書いているけど、大正年間は統計調査の、実に躍進時代だったというふうに思えるわけです。世界的な関連を持って調査を進めてきた。大正9年以後、国勢調査から家計調査まであるでしょう。

辻　労働統計とか、いわゆる生活調査のようなもの、あるいは家計調査のようなものが出てくる時期でしたね、大正というときは。その前は生産統計が全国的に。それからいまのような形になって、大正から昭和にかける時期というのは、いまの家計、生計、未熟ながらも一応の形のできる時期ですわね。

だから、そのころにたまたま先生が統計学を志されて、そしていわゆる学問論というか、そういうふうな本質的な問題に触れると同時に、実際の指数なんかの作成にい

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ろんな提言をされた時期であるわけですけども、大きく分けますと、いまの理論的なもの、それから実際の統計調査との接触、それを通じて先生が特に感じられたとか、あるいはこういう点が特にここでみんなにいっておきたい、というふうなことがおありでしょうか。

宗藤　そうですね。むしろ、その後の方に転換期が起こるんですね。

それで、統計が実質的な効果を上げてきたのが、戦後だといわなければならぬ。標本論が――農作物についてのことぐらいなら、これは決まった場所に決まった肥料を施すという形で、非常に計算可能ですけれども、社会全体の問題は広く調査し、かつ大量な標本を求めなきゃならぬということになってきますので、社会階層の構造というものをよく注意しないと、たとえば生計費にしても――階層が違うというのは、生計費の場合所得を基準にしていますから、所得階層が非常に変わってくれば、何を是とすべきかということが一般的には断言できないわけです。それを生かさなきゃならぬという点では、非常に着目されたのが所得階層別の生計費だったということだったんですね。

それと同じように、今日では中央集権的な社会生活じゃなくなったんですね。地方分権的というのか、地方自治体にすべて地盤を置いて生活を規制するようになったんですね。この点が統計の調査をする場合にも十分考慮されていかなきゃならぬが、まだまだそういう点においては、全国的な家計調査も百何十の都市とかいうようにふえてきていましても、やっぱり都市中心ですからね。だから、何となくまだ地方的色彩を発揮するに足らない

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ものがあると思う。

そうすれば、ちょうど物価指数で日銀が東京を中心に指数をつくって、別に地方を生かして全国性を見る、あるいは同じように生活の地方的色彩を明らかにするためには地方のデータをうまく利用する、そういう調査が非常に必要なんじゃないですか。農作物などは、これは土地の地質をよく考えれば統一ができますけども、そうでない社会生活というものを標本の選定において、どうしても心理的分野が強く出ますわね。

最近、いろんな都市計画に対する調査のようなものを無作為の標本調査で行ったりしても、私も引き出されたりするんですよ。どうして私に当たるのか、不思議なんです。ランダムでセレクトしました、というできますけど、土地の性格を非難するようなことしか書けなくなっちゃうから困るんですがね。

こういう点がまだ未熟でしょうね。全国性は非常に高いけど、地方的色彩——といって、地方をあまり高めますと、これは個人と同じように全体のものがいえなくなってくる。そういうものが、調査において異質性をいかに処理するかということを、もっと統計調査の際にも着目する必要があると思う。

辻　いま、こういうお話伺っているんですけど、その前の時代、われわれの前の時代のことについては特に何かありませんか。こんなことがあったんだけれども、こんなことをちょっと記憶しておけ、というようなことがありましたら。

宗藤　どれを取り上げていいのか、ちょっとわからぬけども、昔の時代と非常に違うのは、統計への理解が、あ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

る時代までは非常に一般社会に尊重されて出ていました。「統計がものをいう」というふうに、ある時代あった。最近は、統計の信頼度が非常に危ういといわれるような面が出てきたような気がします。

そういう意味ではやっぱりもっと十分、とにかく調査であれば前にいったように地についた統計調査をする。理論にしても、やっぱり歴史的意味が出てくるような理論的把握をしないといけないんじゃないかと思うんです。

それからもう1つは、統計学雑誌にしても、アメリカの「アソシエーション」、イギリスの「ローヤル・ソサエティー」のものにしても、別に数理統計の部門が出たでしょう、全然別個に分かれるような。あれ以来学会の傾向が、統計をやっとるのか、数学をやっとるのかわからぬ、そういう非常に憂うべき問題が――これは年寄りだから出てくるのか、昔と違う……。数学の数式をいろいろ展開していっても、何を説明してるのかわからぬ場合があるんですね。数学の演習するなら別です。

それから、プロバビリティーなら別です。それから計量経済学も同様。

私は産大の大学院で計量経済学も兼ねての経済統計学の講義をしていましたが、P. RaoとR. L. Miller共著「Applied Econometrics」(1971年)を使ったのだが。あれが私には注目すべきものに思われた。応用できないんじゃいけないというんで、やっぱり基本的にいえば、いかにこの社会を理解して数値をつくるか、ということに帰着するんじゃないかと思うんです。

辻　数学と統計学との関係をきっちりさせとく、あるいは区別をはっきりさすということですか。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

宗藤　ヘタをやると数学万能になっちゃう。それは、方法論の単なる手段に終始してしまう。これはR．A．フィッシャーの研究が「統計学は本質的に応用数学の一部門なり」ということを、一番最初の本で書いているんですよ。

だから、数学をやってるみたいなんです。

それをいかに社会科学に取り入れても、その人の立場によっては数学演習をやってしまうことにもなる。もっともっと人間に近づいたものを――しかし、数学は近づかぬかというたら、大いに近づいてるわけですけれども。

一般論だけではいいがたい！つの数理偏重、いいかえればカントの哲学の自然科学と数学が最高の基礎づけであると、これを基礎づけるのが学問の本義であるというように考えたものに、うっかりして入らんとも限らぬのです。

辻　そういう意味では、先生方の最初の統計学を創成された時期の考えに、もう1度帰る必要があるのかもしれませんね。

宗藤　もっと批判的にね。そのまま帰ったらいけませんからね。いいものがあれば取り入れて、もっと反省してもらうと。

統計が社会に興味を持たれなくなったらしまいですよ、幾ら統計をつくっても。役所でも統計調査したものを自分の手で握っとって研究して、社会一般の人にわからぬ形で研究を出すでしょう。あれがいけないんだね。もうちょっと平明に数値をつかましてみて、みんなが得心のいくような形にする。

それは仕方がないことは仕方がないんですよ。現代は

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

大型の電算機でもってすべて処理してしまうと。その中で、一部どうこうということはできないからね。そのかわり、過去にもあったように電算機の一部にミスを犯したときに、チェックするものがないんですわ。また電算機でチェックしなきゃならぬ。だから、機械の確実妥当性を信頼しないで検査するということになるんで、何が本体かわからぬようになるんですね。

これは実業界にはそういう点、よくあるんです。前に、なぜプロバビリティーに重点を置いていろいろやって、信用を失ったかというと、予測ですね、政府の調査並びに経済でも同じですから。大きな会社で電算機でやって予測を立てて、いつ、どうなるというような計算をしたら、コトンと外れちゃって、会社が倒産しちゃったというのがあるんですね。電算機買うて倒産したと。(笑)

辻　買わなんだら倒産しなかったと。

宗藤　買わなければならなかったでしょう。少しのろいから、世の中もっと見たでしょう。

電算機の高度の性格からいったら、時間をいかに短縮して見てるかということなんです、将来を。

だから、いま人間の寿命、21世紀の、2000年以後の問題盛んに問題にするけど、ぼくはいつか、わきでちょっと話したことがある。

2000年以後の寿命はいうてくれても、私ら、どうやったら2000年のところへ生きられるのか。それまで寿命が延びるのか、延びないんなら負担ばっかりを文句いうて。つまり、2000何年かのときには年寄りだけいるんでしょう。高齢社会になったら、わずか3人で1人を見んならぬというようなときが来るというんでしょう。来ぬよう

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

になるのが事実じゃないですか。ならせなきゃうそですわね。3人で1人を負担するようなことでは、何にもできなくなるわけですわ。そういうようなことを平気で主張するのが、また私は電算機のおかげでいうんじゃないかという気がする。プロバビリティー計算をいろいろやって。

高齢化社会、あれはもっと素直に考えれば年少者、老齢者、つまり15歳未満の年少者と65歳——60歳でもいいが——その上の者との比率関係で問題になるんだと。上は減るんです、だんだん死んでいくんです。あるところより上にはいかない。ところが年少者が、ほんのわずかなところの者が減ってきよるでしょう。核家族で、子供のめんどう見たくないから1人半がいい、1人にも達しないような子供をつくっているんです、一般的には。

つまり、1人と何がしで平均がいったら、人口減るのに決まってますわね。親なんかが2人死に、子供が1人と半じゃ大きくならぬでしょう。それが生産年齢に進んでいくんだから。

外国からたくさんの人を取り寄せて生産活動させるということになれば、老人をみるよりも、もっと負担がかかりますよ。相当な設備をしなきゃならぬ。欧州で困っとるでしょう。労働力がないから、いろんな人を他国から雇って入れたが、後で処理に困っておる。

まだ国内ならお互いが調節して、不景気ならそれに対応するようにやりますけども、よその人を保障しとるんだから、それに適応するような作業をしやしませんからね。

ただ問題は、やっぱり人口調査の結果でも、非常にい

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

い結果が発表されておりますけれども、やっぱりそういうものの欠陥を、はっきり皆知らしてやるということも必要ですね。国勢調査でも核家族のふえていくことを報告してますよね。核家族となればどういう結果やということを、どうもみんなに負担をかけるからいかぬ、あるいは高年齢社会になるとみんなが苦労するぞ、というところだけ強調して、何年先には非常に老化社会になってくるということやが、だれが老化社会になるということを断言するのか、どうもわからぬのですがね。数字上はわかりますよ。それなら、もっと――政治論になるけど――お医者さんの方へ、それから今日保育所の問題ね、これは人口を減らす1つの手段だと。保育所に何人も預けたら大変ですわ。だから、子供のめんどうをずっと見られぬから保育所に渡しといてもうける。ということは、もうけた金が浮いてるようにとられるんですがね、それじゃ――これは一般に発表するものだから……。(笑)

そういうようなところを一々考えると、もうちょっと統計が一般の人に理解されるように使う。たとえば夏の消費者物価指数でも、季節性の問題というのを解決しないで、物価が上がった、下がった、と、ようけいうでしょう。それで下がったら安心して。それは野菜が豊富に出るようになったとか。そんなに期待しとったら――市の中央市場には出るでしょう。ところが田舎におったら、農家であれば何ぼでも野菜とれるけど、われわれは野菜買おうと思っても、なかなかそう買えるものじゃない。

だから、そういったところが消費生活の場合の生計指数の作成並びに不満等に対して、実際的な内容が薄いということがいえるでしょうね。そういう点で、物価指数

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

を作成する場合でも、標本選定の上で工夫をしなきゃいかぬのじゃないかと。

それから、外国製品が含まれてるから外国の影響で物価が上がるのは当然だと。実は二重価格制の問題ですわね、結局は。外国の価格と日本の価格と同じところで入れて、片っぽが上がればこっちは抑えられる、こっちが上がれば外国への輸出ができぬ、なんていうようなことをいうてるだけじゃ、貿易均衡政策の不満をいってるような-----。

辻　どうもありがとうございました。まだお伺いしたいことがあるんですけども、一応きょうの話は打ち切らしていただきます。

統計数理研究所